

恐れるな、アブラムよ

創世記 15 : 1 - 6



司祭 ヨハネ 井田 泉

2016年8月7日
聖霊降臨後第12主日

奈良基督教会にて

しばらく前に創世記第 18 章からアブラハムのお話をしましたが、今日はそれより 3 章さかのぼった第 15 章のお話です。18 章では彼の名前は「アブラハム」だったのですが、今日の 15 章では元々の名前「アブラム」として語られています。この後に神が彼の名前を、アブラムからアブラハムへと変えられたのです。今日は 15 章の本文どおり、アブラムで通すことにします。

わたしたちの信仰のおおもとをたどれば、2000 年前のイエス・キリスト、さらにおよそ 2000 年を遡ってアブラハム（アブラム）に至ります。彼の信仰と生きる道の初めには、神の言葉がありました。

「主はアブラムに言われた」創世記 12:1

これがアブラムの出発です。彼は主の言葉に従って故郷を離れ、親族と別れて、神が示される地へと旅立ちました。神は彼を祝福すると言われ、さらに彼をとおして地上のあらゆる人々を祝福する、「あなたは祝福の源となる」（創世記 12:2）と言われました。

それ以来、長い年月が経ちました。彼とその家族、一族の旅路は困難と危機の連続でした。内には家族の葛藤と別離があり、外には他の民族との危うい同盟と敵対がありました。

そして彼の唯一の拠り所である神は、いつもその存在を彼に感じさせ、語りかけてくださるわけではありません。不安、葛藤を抱えつつ、アブラムは現実起こってくる危険な事態に次々に対処しなければなりませんでした。

しばらく前（直前の 14 章）、彼は、ソドムに住む甥のロトが

戦争に巻き込まれて捕虜になったと聞き、家の者 318 人を率いて出動し、ロトとその一族と財産を取り戻して帰ってきたことがありました。これは現実には、四人の王の連合軍に対して戦争している五人の王の同盟軍に荷担することであったのです。

大勝利を収めて帰還したアブラムに対して、甥のロトが属するソドムの王はアブラムを賞賛し、莫大な報酬を与えようとしていました。しかしアブラムはそれを拒みました。彼はソドムとその王の墮落を以前からはっきりと感じていて、自分の道に、つまりは神の道に反することはできないと、はっきりと示したのです。

このように彼は、命に関わる危機を通り、また富の誘惑から人生の道を誤る危機を回避して、しばらくは平穏な生活に戻ったのでした。

けれども平穏の中で、あらためて悩みがのしかかってきます。それはすでに自分たちは老いてしまったのに、神が約束されたはずの子どもが与えられないことでした。もうひとつは、諸民族に囲まれて生活するこの異国の地で、自分たち一族は滅びてしまうのではないか、という恐怖です。

祝福の約束をなされたはずの神はずっと沈黙しておられる。アブラムはのしかかる不安と苦悩に押しつぶされそうになっています。

しかしここで神が彼に語りかけられます。これが今日の 15 章の冒頭です。

「これらのことの^{あと}後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。
『恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなた

の受ける報いは非常に大きいであろう。』 15:1

主の言葉を一つずつ確かめてみましょう。

まず「**恐れるな**」と主はアブラムに言われました。沈黙して、彼のことなど忘れてしまっておられるかのように思えた神さまですが、神は彼の苦悩、恐れを知っておられました。恐れているアブラムに対して、神は「**恐れるな**」と言われるのです。

「**アブラムよ**」と、神は彼を名指しで呼ばれます。漠然と神の声が響いたのではなく、弓を引き絞って的を射るように、主の言葉はアブラムの心と体に命中するのです。

「**恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。**」

アブラムとその一族は諸民族の間で常に命の危険にさらされています。また外から内から来る様々な危険と心配に苦しんでいます。体はこわばり、心は不安にさらされています。そのアブラムの盾になる。わたしがあなたの盾となってあなたを守る、と主は言われるのです。

「**恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。**」

この言葉を、いかにわたしたちも必要としていることでしょうか。時代や状況は違っても、このアブラムという信仰の先祖が聞かされた主の言葉を、実はわたしたちも聞かされているのです。

「**あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。**」

これはどう受けとめたらいいのでしょうか。アブラムはソド

ムの王が与えようと言った報酬を拒みました。誘惑を退けて、富ではなく、神を選んだのです。しかし神は何を報いとして与えると言われるのでしょうか。ここで、アブラムの神に対する疑問と嘆きが溢れ出してきます。あなたは、約束の子どもを与えてくださらないではないか。

「アブラムは尋ねた。『わが神、主よ。わたしに何をくださるのでしょうか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。』アブラムは言葉をついだ。『御覽のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。』

見よ、主の言葉があった。『その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。』 15:2-4

このように言われて、アブラムは納得できませんでした。もう現実にはあり得ないことを神が言われていると感じるのです。

旧約聖書から教えられるのは、神に文句を言ってよい、ということ。わだかまったものを率直に神にぶつける。そこから神とわたしたちと本物の関係が生まれます。

「主は彼を外に連れ出して言われた。『天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。』そして言われた。『あなたの子孫はこのようになる。』 15:5

ここで大切に關心を注ぎたいのは、主がアブラムを天幕の中から外に連れ出されたことです。自分の見える範囲、考え得る

範囲から外に、神は彼を連れ出されました。

天幕から出ると、空は満天の星。暗い夜空に輝く無数の星です。

天を仰いでいると、星は何かをささやいている。星を見つめて、どのくらい時間がたったのでしょうか。星ははっきりと呼びかけてくる。星の呼び声が心のうちに響くのです。

「ただ信じなさい。恐れるな、アブラムよ。ただ信じなさい。神があなたの盾。神が生きておられる。神が守ってくださる。神がなしてくださる。恐れるな、アブラムよ。ただ信じなさい。あなたの受ける報いは大きい。」

アブラムのうちに何がどのように起こったのかはわかりません。ただ聖書が告げるのは、

「アブラムは主を信じた。」 5:6

ということだけです。しかし今、このことだけが必要だったのです。彼は自分の過去も現在も将来も、葛藤も不安も希望も全部、神に託し、神に賭けたのです。

「主はそれを彼の義と認められた。」 5:6

神はこの信じたアブラムを、決定的に肯定し、ご自分のうちに受け入れられました。

10 数年前、主の言葉に従って、行き先を知らずに旅立ったときが、彼の第1の召命と信仰の出発であったとすれば、今、神の第2の召命を受けて第2の信仰の旅立ちが始まります。

これによってアブラムの人生が揺らぐことのない、過ちのない、確固としたものとなった、というのではありません。この

後のアブラムの生涯は、これまで以上に波乱があり葛藤があり、迷いと過ちも起こるのです。しかしそれでも、アブラムに語りかけられた主は彼を見捨てず、祝福の約束を実現して行かれます。

4000年前のわたしたちの信仰の祖先アブラムが経験したことは、わたしたちと無関係ではありません。

「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。」

このアブラムのところに、自分の名前を入れて、主の呼びかけを聞きましょう。

「恐れるな、〇〇よ。わたしはあなたの盾である。」

わたしたちも天幕から出て、天を仰いで星を見つめましょう。

わたしたちも星を見つめる。星がわたしたちにも何かを語りかけてくれるかもしれません。

しかしわたしたちには、わたしたちに対して決定的に呼びかけてくださる星があります。それは十字架の主です。

「わたしは、輝く明けの明星である。」 ヨハネの黙示録 22:16

十字架の主イエス・キリストがわたしたちにはっきり呼びかけてこられます。

「恐れるな、〇〇よ。わたしはあなたの盾であり、命である。」

祈りましょう。

主なる神さま、わたしたちに対しても「恐れるな、わたしはあなたの盾である」と言ってください。あなたをはっきりと信

じて生きる者としてください。この世の試練や誘惑の中でわたしたちを守って、神の国を目指す道を歩ませてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン